

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

► 文明開化と文学－「浮雲」と「舞姫」を中心に

doi:10.29714/TKJJ.200003.0008

淡江日本論叢, (9), 2000

作者/Author：陳伯陶

頁數/Page：150-167

出版日期/Publication Date：2000/03

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.200003.0008>



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



文明開化と文学—「浮雲」と「舞姫」を中心に

淡江大学教授

陳伯陶

一、文明開化と近代文学

広く知られているように、夏目漱石は明治四十四年に行った講演で、日本の近代化のプログラムを〈外発的〉という言葉で痛烈に批判している（「現代日本の開化」）。漱石は西洋を師表とし、それにひたすら追隨した文明開化の軽薄性や偽物性を、「自己本位の能力を失つて外から無理押しに押されて否応なし」に近代化していった過程として批判したのである。漱石がこうした考え方を明確に把握するのは、皮肉にも英語・英文学研究の名でロンドンに明治30年代の留学当時のことであつた。当時の日記に、次のような記事がある。

日本ハ三十年前ニ覚メタルト云フ然レドモ半鐘ノ声デ急ニ飛ビ起キタルナリ其
覚メタルハ本当ノ覚メタルニアラズ狼狽シツツアルナリ只西洋カラ吸収スルニ急
ニシテ消化スルニ暇ナキナリ、文学モ政治モ商業モ皆然ラン日本ハ真ニ目が醒ネ
バダメダ(明治三十四年三月十六日)

この短い漱石の感想の中に、日本の近代化の過程に内包した矛盾の根源がほぼ正確に言いあてられている。彼は小説「三四郎」で、広田先生の口を借りて、日露戦争の勝利に酔い痴れた日本人に、「日本は亡びるね」という冷水を浴びせたと同じ文明批評である。漱石と同じ頃の文学者、永井荷風や森鷗外もそれぞれの形で、日本文明の軽薄性や偽物性に醒めた認識に辿りついている。鷗外も当時の文明開化の様相を「普請中」と評し、荷風は「冷笑」その他で、皮相で形骸的な日本文明への呪咀を語って江戸趣味の世界へ隠れた(注1)。これは決して偶然ではない。彼らは英・独・露文学に接し、或いは実地に外国を見ているからだ。彼らの目には当然これらの外国と比較して、その到達した結論が、日本の近代化がそれなりに進展し、ある帰結を遂げた明治四十年代になって、その起点においてすでに孕まれていた歪みがようやく顕在化してきたと言うのである。

幕藩体制の内部矛盾の激化を早め、江戸幕府の崩壊をうながした黒船の脅威、ヨーロッパ列強の強圧による植民地化の危機は、江戸幕府の衰亡後も、依然として大きな問題として残されていた。王政復活をめざしたはずの維新が、結果として封建社会の古代から近代への轉換を強いられたのは、いわば必然の事態でもあつた。半世紀に近い彼我の落差を埋

め、日本を近代国家として急速に成長させることが、維新政府の当面する最大の急務となったからである。天皇は「知識ヲ広く世界ニ求メ大イニ皇基ヲ振起スベシ」と五箇条のご誓文で宣言し、その親政をうたう新政権は、旧秩序の徹底的な改革と統一国家による民族の独立を目指して、富国強兵・殖産興業を合い言葉とする啓蒙的開明政策を採用した。西欧文明の摂取と吸収が急がれ、資本主義体制の保護・育成が計られ、世は挙げて、いわゆる文明開化の風潮に包まれることになったのである。その結果が「ざんぎり頭をたたいて見おれば、文明開化の音がする」と言う、それこそ「猫も杓子」も馬鹿の一つ覚えのように文明開化を口にし、明治20年を頂点とする「鹿鳴館時代」がもたらした当時の世相に、彼らは居ても立ってもいられなくなったのであろう。

絶対主義政権によって強行された近代化のプログラムは、いわば〈上からの近代化〉ともいうべき開化の方式が、結局は近代化の不徹底による封建遺制の温存をもたらし、あるいは時代の要求が物質文明の摂取に急で、精神文化の開発が著しくたち遅れるという事態が生じた。漱石の批判は、むしろ、そうした事態への批判にも拡大しうるわけであるが、文明開化ごうごうたる時潮の渦中で、当代の政治家や知識人に漱石と同じ認識を期待するのは無理である。強いていえば、当時旧幕臣の士族達の明治新政府に対する不満が昂じて発せられた、過去の武士の倫理に生きる前朝の遺臣の気質的な反抗であって、思想の類ではない。

事情はむしろ逆である。明六社に集った有数の自称文明開化のトップを歩むという政府の高官を始め、当時の時勢を動かした多くの知識人たちは、日本と西洋との距離をまだ空間の差としては認識してはいないで、それをあくまでも時間の問題でしか認識していなかった。だから、西洋はつねに追跡可能な、そして何時の日にか確実に到達できる目標として、彼らの前にあった。

しばらく文学を離れて当時の世相や政府・知識人の実状を考察すると、当時の、これらの啓蒙思想家たちは、文明開化の可能性を一度も疑わなかつただけでなく、つまり、文明開化の未来像への具体的な構想が欠如していたことに背を向けて、開化を推進する自己(政府)の方針や位置と開化の方向との完全一致を確信していた。知識人の西周・加藤弘之・森有礼らの明六社同人についても同じことが言える。ちなみに遠山茂樹の有名な批判は、彼らの説く自由や文明や開化の概念を

純粋な封建思想、尊皇攘夷の名分論に対しては、かなり徹底的な批判を行い、

airiti

その限りで近代思想の素地を作り出す役割を果たしたが、その批判は、政府の絶対主義が針路を指示し、それへの国民的協力を啓蒙する域、いわば漸進主義を出なかった（「明治維新」）（注2）。

と言っている。かような批判は、そうした事情の指摘でもあったわけである。明六社とは明らかに一線を画した福沢諭吉においてさえ、文明開化を疑い、したがって、その推進者である自己と現実との乖離を疑う姿勢は、本質としてまだなかった。

かような情勢のもとで、文学の近代化が、そうした啓蒙思想家の仕事によってもうながされた事実は否定できない。明六社の時点でいえば、時代の要求である物質文明偏重の一次的な帰結として、そしてまた、おそらくは武士を出自とする啓蒙思想家の病疾に近い武士的な文学観、つまり「総体としての文学無用観」に災いされて、文学の近代化は彼らのプログラムには容易に乗らなかった。たとえば、諭吉の説く〈実学〉は丸山真男によって論証されたように、当時の世相は、物理学を基軸とする世界観であって（「福沢に於ける『実学』の轉回」）（注3）、文学とは「解し難き古文を読み、和歌を楽しみ、詩を作るなど世上の実なき文学」（「学問のすゝめ」初篇）（注4）として、芸術としての文学を否定し、文学創造の道を閉ざしたのである。また、明六社の機関誌「明六雑誌」はその全四十三号に、政治・経済・外交・社会・宗教・法律・歴史・教育・自然科学等のあらゆる分野にわたる百項余篇の論文を掲載しながら、文学についての本格的な論及はわずかに西周の「知説」一篇にとどまった（注5）。それも西洋と日本との単純な比喻、つまり、伝統的な日本文芸の様式を適用しながら、ヨーロッパ文学の類別を説いただけの形式論にすぎなかったのである。

にもかかわらず、「近代思想の素地」を用意した初期の啓蒙思潮は、当然、近代文学の素地をも準備することになる。たとえば明治十年前後から明確になる文学的啓蒙期に、時潮の有力な指導理念であった改良主義、つまり、社会進化論のいわば実践哲学的な現実への適応形式と、明六社同人のいわゆる「保守的思考形式」が、伝統的な詩歌の改良をめざした「新体詩抄」（明治十五年頃）を試み、ついで、外山正一の講義を受講した坪内逍遙が師の試みの後を襲って、戯作の改良をこころざした「小説神髓」（明治十八年）を書き、ここにいたって、日本文学の近代化は確乎として、ひとつの方向を掴んだといえるのである（注6）。これは日本の近代化と文学の近代化を、過不足のない相似型として捉えうる時点である。

けれども、〈日本の文明開化と文学〉という、それ自体が茫漠とした主題を追求する有効な判断のメドとして、文明開化の時潮に即して文学の近代化が果たして自分の進む方向を確かに把握していたかは疑問の残るところである。すなわち、日本の文学の近代化には、明治の文明開化当時、すでに同時代の世界文学とその構想原理において、すでにある程度の位相差が存在していた。その事実を明治四十年代にあらためて確認する試みのひとつが、夏目漱石の「現代日本の開化」だったと言えよう。ここでの主要な目的は、実はそうした点についての多少の考察にある。

二、「浮雲」にみる反近代

漱石が「現代日本の開化」において語ったと同質のモチーフを、おそらくもっとも早く、文学的に形象化しようとした作家は二葉亭四迷である。彼がなぜ漱石と同じような認識を持つになったのかは、本論の意図するものではないので省略する。しかし、明治二十年に二葉亭が処女作の「浮雲」を「言文一致体」で書いたとき、日本の近代文学史は同時代文明批判の最初の試みを持つことになったのである。この小説の題意が文明開化の風潮にただよう浮雲のような日本人への批判を寓していたことは、今ではすでに定説となっている。

長谷川君の傑作として、有名な「浮雲」を創作するに就て長谷川君が如何に苦心したかといふ事と、あの作に現はれた中心思想とお話しやうと思ひます。…あれは園田せい子といふ女が主人公でありました。このせい子のやうな極く無邪気な人は、相手の人次第で何うにでも動く、といふのが、日本人の性質である。つまり自働的でなくて他働的であるといふのです。その他働的だからいゝものが導けばいいが、悪いものに誘はれると悪くなる。これが日本人で、このせい子が日本人を代表したものだとしたのが『浮雲』の思想であつた。（矢崎嵯峨舎「『浮雲』の苦心と思想〔「新小説」明治四十二年六月〕」）

「浮雲」は上記の言ういわゆる「他動的」日本の近代化を最初に小説化したものとして、この作品を読んで始めて日本の近代化が漱石の言うような、外からの押しつけであることが理解できよう。

「浮雲」の主人公内海文三は某省の判任御用掛をつとめる下級官吏である。いや、厳密には下級官吏であった。小説は、文三が役所を猷首された日から始まる。この〈背はスラリとしてゐる〉男は、内攻的で非行動的な、どちらかといえばハムレット型の人間だが、

airiti

伯介で不屈な自我を持った男でもある。封建的な人間関係によって組みたてられ、いわば縦の倫理をなお温存する原始的な官僚機構の内部で、屈服や妥協を肯んじない、かたくなな性格のために上司から忌避され、あたかも滑らかに噛みあう歯車にまぎれこんだ小さな石のように、組織の外へ非情にはじきだされる。

文三のかたくなな性格は、換言すれば実は潔癖な倫理感であり、たとえば立身出世型の才子である同僚の本田昇が復職のための運動をすすめに現われたとき、課長への口利きをひきうけてもよいという親切ごかしの申出を憤然としてしりぞけるあたりにも、一世代前の士族の思考形態を如実に示している。課長に頭を下げることはまだ許せる。しかし、〈不具戴天の敵〉とも思い、〈生ながら其肉を啖はなければ此熱腸が冷されぬ〉とさえ思っている本田昇に、〈今更手を杖いて一着を輪する事は、文三には死しても出来ぬ〉と、彼は考える。文三のこのはげしい反撥の底には、上司に汲々として保身を計る本田の生きかたへの強い批判、すなわち反骨精神があった。〈俗務をおツつくねて、課長の顔色を承けて、強て笑ツたり諫言を呈したり、四ツ這に這廻はツたり、乞食にも劣る真似をして漸くの事で三十五円の慈恵金に有附いた……それが何処が荣誉になる。頼まれても文三には其様な卑屈な真似は出来ぬ〉のであった。

思想と実行の完全な一致を要求する、文三固有の〈正直〉というモラルを、あくまでもつらぬいて生きようとするので、彼の生き方は、それはまた二葉亭四迷自身の倫理でもあったわけで、自我の権威と尊厳に目覚めた知識人の姿がここにあったといえよう。だから、かれは自我の権威を犯すものにはげしく反噬する。しかし、人間の本質的な平等と連帯を要求する横の倫理に固執すればするほど、文三は彼をもそのなかに組みこもうとする縦の倫理と相剋し、敗れざるをえない。文三は次第に孤立し、絶望してゆく。

文三の孤立は、彼の止宿する園田の家で、叔母のお政、娘のお勢、そして、彼らに巧みにとりいつてゆく本田昇らの織りなす人間関係のなかで、きわめて象徴的に描かれる。お政は文三の鹹首を聞いて失望し、文三の無能をののしり、復職の運動を拒む矜持を理解出来なかった。お政のこの憤激は、官吏の文三にゆくゆくはお勢を嫁がせてという、ひそかな計画の挫折した落胆をかくさない。〈貸間あり 賄付きに 娘付き〉という川柳の詠まれた時代である。お政の計算は当時の世風からふかく咎めるには酷であろう。それが明治と言う新時代を生き抜いていく底辺の人たちの考えであり、处世術でもあったろう。当然お政は文三を見捨て、手のひらをかえすように冷淡になる。そのために彼女はあからさまに、文三とお勢の仲を裂こうとする。

airiti

お勢は時代の生んだ新しい女である。漢学と英語を学び、〈折節は日本婦人の有様、束髪
の利害、さては男女交際の得失〉など聞きかじりの議論を口ばしり、母のお政を教育の無
い古い女だと批判する。文三とともに新しい世代を代表する人間には違いない。しかし、
それはあくまでも聞きかじりの知識であって、彼女の真の思想ではなかった。

文三は恋人のお勢を信じている。お勢もはじめは文三の良き理解者のように振舞う。免
官になった文三をかばって、お政と大喧嘩を演じたりもする。しかし、彼女は所詮〈浮雲〉
に似た人間でしかなかった。

ここで二葉亭四迷は当世流の才子、本田昇を登場させ、文三と対照させることによって
当時の世相を描き出そうとする意図が見えてくる。官僚組織の精巧な歯車の一つとしてみ
ごとに嵌めこまれている本田昇は、〈能く課長殿に仕へる〉〈物など言懸けられた時は、ま
づ忙はしく席を離れ、仔細らしく小首を傾けて謹で承り、承り終つてさて莞爾微笑して恭
し〈御返答申上る〉〈日曜日には、御機嫌伺ひと号して課長殿の私邸へ伺候し、囲碁のお相
手をもすれば御私用をも達す〉という、保身のためには阿諛や追従をも意に介さない時代
を先取った青年であった。この弁舌がさわやかで、〈また頗る愛嬌に富みて、極て世辞が
よい〉青年は、文三に失望したお政の目には、いかにも頼もしげに見え、お勢との未来を
夢想するようにさえなる。お勢も文三の願いを裏切って昇に魅惑され、心を傾けてゆく。
文三の憤怒と懊悩は深まり、ついにある日、文三とお勢は決定的に衝突する。

こうして、官吏の世界で敗退した文三は、園田の家のなかでも、孤立を深めてゆく。茶
の間ではお政とお勢と昇が賑やかに笑い声をたて、文三はそれに耳をそばだてながら、二
階の自室で撫然としてうずくまっている。小説にしばしば現われるこの構図は、文三の孤
立にとってまことに象徴的である。文三の辿る悲劇は、よく比較されるように、ロシア文
学のいわゆる〈余計者〉的な知識人の苦悩に似ている。これはロシア文学に現われる典型
的人間像の一つであって、高い教養と強い個性のために、かえって現実への適応性を失な
い、社会から疎外されて孤立する人間たちである。二つの文明の落差にかかわって、ヨー
ロッパに留学して帰国した知識人の悲劇として現われる場合が多い。ここで二葉亭の文学
的教養が、主としてロシア文学を土台にして築かれた事実は、決して偶然ではなかったの
である。しかし、ロシア文学と違うところは、文三には、現実に対する不満への抵抗と脱
出への試みがない。お政や昇にいわせれば、〈づうづうしく、のんびんくらりと、大飯を食
らつて〉園田の家へいすわっている消極的な存在であった。〈傷付けられた感情の置き場を
見付けに行〉こうとは決してしない、それこそ箸にも棒にも掛からない存在でしかなかつ

た。

これはお勢への未練でもあり、傷ついた感情の避難所を信じることの不可能な、日本の孤独な当時の知識人の悲劇の象徴でもある。今までの石高を藩主からもらい、のうのうと四民の上にあぐらをかいていた武士階級の悲劇、そして生産力を持たない士族のいく末を文三によって代表している。と同時に、二葉亭四迷は文三が園田の家へとどまらねばならない必然を、小説のモチーフに含めることによって、当時の浅薄な文明開化・近代化を風刺したかったのである。なぜなら、文三はお勢の批判的存在としての意味を、他方で担っている。お勢によって当時の日本人を代表させ、その浮雲のような明治二十年代の文明開化による士族のおかれた無力感、時勢に付いていけない投げだしの处世術などの様態を批判するという意図を実現するとしたら、作者は小説のなかで、文三を通じてそれを行なうより仕方がない。結果として、二葉亭はその試みを放棄した。小説は中絶によって、意図はまだ実現していない。しかし、慎重な読者ならば、軽佻な文明開化への批判が、この小説の低音部の主題として、ひそかに流れている事実にすぐ気づくはずである。たとえば、就職の依頼に旧師を訪れた文三は、いつもながらの長談義を聞かされる。〈授業の模様、旧生徒の噂、留学、流動、「たいむす」、バツハア、スペンサーと相変らぬ嘶で、おもしろくも何ともない〉という文三の感想には、時潮へのするどい諷刺がある。この旧師の訪問には、知ったかぶりの明治20年代の風潮が完全に圧縮されている。

二葉亭が「浮雲」をなぜ中絶したか。それには、さまざまな理由が考えられる。これには二葉亭自身の、文学に対する姿勢の問題もあり、世評による作家的自信の喪失、とくに尾崎紅葉の出現によって、自己の文学的才能を懷疑したことなども理由に挙げられよう。それと同時に、小説の構造自体にふくまれた根本的な矛盾もある。つまり、文三の敗北と無力を描きながら——それはまた、作家自身の〈思想〉の敗北と無力にほかならないが——、そのおなじ文三によってお勢を批判させるという構想は、文三に托された挫折体験の重さに比例して、構想自体の挫折を強いる危険がつねにある。作者の書き変えた最後の構想（ノート）が、お勢が本田に嫁するのに落胆失望し、食費を払ひかねて叔母にいためられ、遂に狂気となり瘋癲病院に入りしは翌年三月頃なりけり〉と改められているのは興味深い。

「浮雲」は現に書きあげられた形では、文三の悲劇に焦点があって、お勢のその後のたどる道は示されていない。しかし、作者自身の残したノート風な構想（「くち葉集ひとかごめ」）（注7）によれば、お勢にも悲劇的な結末が用意されていたらしい。現行の「浮雲」

は第十九回で中絶しているが、ノートではこのあと第二十三回の〈大団円〉までが構想され、文三は最後に発狂する。同時に、お勢は昇と通じ、〈見捨てられる〉というありふれた悲劇の道を辿ることになる。〈お勢の身の終り〉という一行もある。これだけでは判断のつけようもないが、いずれにしても、お勢の身の成りゆきがさほど明るいものでなかったのは確実だろう。

形骸だけの新しい女が主体喪失の仮面劇を踊って、これも時代の生んだ軽薄な才子にもあそばされ、あまりにも平凡な女の悲劇に落ちてゆく。この人間喜劇には、たしかに時潮への痛烈な批判がある。がりにこの構想が実現していたら、「浮雲」は現行の形よりも、はるかに奥行きがふかい傑作となったかもしれない。

要約していえば、「浮雲」の構想は内攻的な知識人が封建的な環境のなかで苦悩し、状況を変革する方途を見出せぬまま、次第に追いつめられてゆく自我のあえぎに光をあて、しかも、そうした前近代的な矛盾を残したままで近代化されてゆく明治社会のひずみ、つまり、皮相な欧化熱にのたうち回る同時代文明の性格をも、あわせて批判しようとしたところに成り立っていたのである。そこに二葉亭の大きな独創があったわけで、この小説が、本格的な近代リアリズムの歴史的記念碑とされるゆえんである。

三、「舞姫」にみる反近代

「浮雲」が挫折した翌年、森鷗外の小説「舞姫」が『国民の友』（明治二十三年一月）に発表された。これは作者のドイツ留学の体験と深くつながった小説で、主人公の太田豊太郎は、たとえば二葉亭が自己の思想を内海文三に托したよりももっと密接な関係で、鷗外の〈詩と真実〉がそこにあったからこそ、この小説がしばしば一種の私小説として読まれてきたゆえんでもある。しかし、ここでは作品のもっとも素朴な読みかたにしたがって、鷗外の私生活にまで言及しないことにする。それというのも、鷗外自身の私生活に踏み込みここと自体、本論文の主眼ではないからだ。

鷗外は明治十七年から二十一年まで、足かけ五年間、軍医学研究の名目でドイツに留学したが、帰国後まもなく、エリスという女性が鷗外の後を追って来朝するという事件が起こっている。スキャンダルを恐れた森家の人々、とくに母親の峰子や義弟の小金井良精、および「舞姫」の相沢謙吉のモデルと目される親友の賀古鶴所らの奔走で、エリスは何事もなく帰国の船に乗るが、その間の経緯は、鷗外をとりまく〈家〉の倫理を明白に語っている。だから、鷗外が「舞姫」のヒロインにエリスの名をあたえたとき（ERIS、ギリシャの神で論争や不和を好む女神）、彼は明白に二様の読者を予想していたはずである。つまり、

ヒロインの名前には無感動な一般の読者と、エリスの名にまつわる自分の悪夢をなお忘れかねていたはずの森家の人々と、この両者には小説の受容のしかたに決定的な差があったのは当然で、それは鷗外の計算にはっきり含まれていたに違いない。したがって、ヒロインにエリスの名を与えた鷗外の心情にまでたちもどるとき、小説の理解には別な角度が可能になる。たとえば平野謙のように、この小説のモチーフを母峰子への静かな反抗にあるとするごとき理解も成り立つのである（注8）。ただし、ここでは、エリス事件に象徴される、日本の風土の論理に傷ついた鷗外が、実生活では不可能な流血を小説という仮構の世界で代償したところに、この小説の真のモチーフを見たいと思う。

太田豊太郎は早く父を失い、母親の手で育てられる。きびしい庭訓にしたがって、孜孜として勉学にいそしみ、大学を首席で卒業する。ただちに某省に出仕し、〈長官の覚え〉もめでたく、選ばれてドイツに留学する。二葉亭の戯筆を借りて言えば、〈天帝の愛子、運命の寵臣、人の中の人、男の中の男、と世の人の尊重の的、羨望の府となる昔所謂お役人様、今の所謂官員さま、後の世になれば社会の公僕とか何とか名告るべき方々〉（『浮雲』第二篇）の一人として、洋々たる未来を確実につかんだ少壮官吏である。

しかし、勇みたってベルリンに赴いた豊太郎は、ヨーロッパの自由な空気に触れて、確実に変貌してゆく。勤勉な学生、善良な官吏として、母や官長のいいなりに、封建的な環境に自己を殺していた過去の生きかたに懐疑を生じ、また、〈活きたる辞書〉〈活きたる法律〉として終始するはずの未来の像にも、耐えがたい嫌悪をおぼえる。〈他人の意志で動かされるのではない、自由な生を望むく私〉の目覚めを体験する。官長の支配を脱して、法律よりも歴史・文学に心を寄せる、〈人なみならぬ面もちしたる男〉に成長していったのである。このあたりの描写は、自己の切実な体験を背後においているだけに、「自我覚醒」の感動を生き生きと伝えて鮮やかである。

豊太郎はおなじ頃、ふとした機縁で、エリスという貧しい踊り子と知りあったが、彼を疎んじる留学生仲間に讒訴されて、免官の憂き目にあう。エリスとの恋愛が自我のあかしであったかどうかはともかく、太田豊太郎もまた、みずからのなかに奇怪な〈生〉をめざめさせた一人の人間であり、だから、自我をつらぬく代償として官僚組織の外側にはじきだされてゆく。彼は日本を捨て、官吏として約束された栄達を捨てて、エリスとの愛を選ぶ。彼女と同棲して、〈貧きが中にも楽しき〉生活がつづいた。

悲劇は、親友の相沢謙吉の出現とともに始まる。政界の実力者である天方伯爵に随行して、相沢は意気揚々とベルリンを訪れる。天方伯の庇護で、いま一度栄光の道へ復帰せよ

との好餌が投げられた。天方はエリスとの別離を条件に、豊太郎を日本に伴おうと申し出、豊太郎は二者択一を強いられ、ついに天方の差しのべる手を拒むことができなかった。エリスを置き去りにして、功名を選んだのである。豊太郎の子をみごもっていたエリスは、背信を知って発狂し、豊太郎は狂女をその年老いた母に托して帰国の船に乗る。

小説はその船中での回想として綴られてゆくわけだが、豊太郎は、くベルリンでの自由が足に糸を結んで放たれた島の自由にすぎなかった)、という痛切な自覚を語っている。糸はかつて故国の官長ににぎられ、いまは天方伯の手中にある。(足の糸は解くに由なし)という諦念と、しかし、(相沢謙吉が如き良友は世にまた得がたかるべし。されど我脳裡に一点の彼を憎むところ今日までも残りけり)という感慨を消すことができない。鴎外は『舞姫』を借りて自己の矛盾した心理を見事に描き、それが当時の文明開化の諸相にも匹敵する日本の世相を反映したものとして受け取ることも出来よう。それはすなわち自己の意識や意志によってではなく、外来の抵抗しがたい圧力に屈したことを物語っている。ちょうど漱石の言ったように、日本の近代化は、外からの押しつけであったことと一致する。

四、「浮雲」と「舞姫」の比較

上記のくだりをみてくると、鴎外の「舞姫」が、「浮雲」、とくに現に書かれた形の「浮雲」と、きわめて酷似したテーマで書かれていることに気づく。少なくとも、この二つの小説にはいくつかの共通点がある。

まず第一に、下級官吏と上級官吏の差はあるが、ともに官吏の世界で傷つく知識人の心情を描いていること。二人の主人公は、いずれも〈私〉に固執する代償として、官吏としての栄進を断たれる。

第二に、文三は体制への妥協を肯んぜずに、みずからの行きかたを貫き、豊太郎は屈服を選んで体制にふたたび組みこまれてゆく。文三は糸を切り、豊太郎は切れなかったが、いずれにしても、かれらは大きな代償を支払わねばならなかった。文三の末路には発狂が予定され、そして豊太郎は愛人を発狂させる。悲劇の構造はみごとな相似形を描いていたのである。

むろん、表現的構造の面では、「浮雲」と「舞姫」には決定的な差がある。言文一致の口語文体を採用した前者は、「外的視点」で事件の進行を追う二葉四迷の見事な文章と、流麗な文語文体によって表出される後者の鴎外は、豊太郎を一人称主体とする「内的視点」で統一され、しかも、事件をすでに終ったものとして捉えることでのみ可能な回想形式を採用している。この異質はそれぞれのモチーフにかかわって重大であり、とくに鴎外論の重

要なテーマも引き出せるはずだが、ここではその点についての論及を省略する。

五、結び

「浮雲」と「舞姫」はそれぞれの仕方で、日本の近代化に内包する矛盾に迫った作品である。当時の知識人が自我形成の過程で対決を強いられた強大な壁の存在を、官吏の世界と自我というきわめて象徴的な対立関係で描いた作品であった。ただ、二葉亭はどちらかといえば、自我の屈服を強いる対立的世界の矛盾に目を向けたのに対して、鴎外の視線はより多くの現実と対立し、敵対する自我自体の構造に注がれていたという差はある。

「舞姫」において、太田豊太郎がエリスを捨てて功名を選んだという意味は、しかし、作者自身の意図からいえば、豊太郎はいかなる決定もくだしてはいないのである。彼は醒めた認識によって、あるいは意志の判断によって功名を選んだのではなく、鴎外の計算では、それはあくまでも偶然の事態にすぎなかった。

帰国の意志を天方に問われたとき、豊太郎の反応を次のように描いている。

（天方伯の）其気色辞むべくもあらず。あなやと思ひしが、……若しこの手にしも鎚らずば、本国をも失ひ、名誉をも挽きかへさん道をも絶ち、身はこの広漠たる欧州大都の人の海に葬られんかと思ふ念、心頭を衝いて起れり。嗚呼、何等の特操なき心ぞ、「承はり侍り」と応へたるは。

〈何等の特操なき心ぞ〉という嗟嘆は、形を変えて、豊太郎のつきつめた内省としてしばしば現われる。相沢が最初にエリスとの訣別をすすめたとき、それをきっぱりと拒めなかったのも——このときの曖昧な承諾が天方に伝えられ、天方が豊太郎を用い始めるという形をとって、悲劇の条件が形成されてゆくのであるが——それも友人の善意に抵抗できぬ性格の弱さゆえであり、さかのぼって讒訴の遠因を作った留学生仲間での孤立も、おのれに侍むところがある強い個性からではなく、〈処女に似て〉、〈弱くふびんなる心〉のせいであった。ベルリンへの旅立ちの日に、

舟の横浜を離るゝまでは、天晴豪傑と思ひし身も、せきあへぬ涙に手巾を濡しつるを我れ乍ら怪しと思ひしが、これぞながくに我本性なりける。此心は生ながらにやありけん、又早く父を失ひて母の手に育てられしによりてや生しけん

という自省もある。これは自我覚醒の劇を体験しながら、思想をもっては克服できなかった性格の弱さであり、自我内部の、無意識との境界にひそむ脆弱な部分である。小説の脈絡を辿ってゆけば、豊太郎の悔恨は〈弱くふびんなる心〉の自覚とつねに重層している。

豊太郎のこの〈弱さ〉は小説の主題と密接にかかわりながら、「舞姫」の描く悲劇の真の誘因として、功名と恋愛の両極を不安定にゆれうごく豊太郎の心情が、いずれかへの決断を迫られたとき、それを唐突に中断して、運命のおとし穴へ彼をさそう。作者はあまり巧妙とはいえぬ作為を弄して、豊太郎の落ちる陥穽を用意してゆく。

天方に帰国を承諾した豊太郎は、一時の衝動から醒めてみれば、さすがにエリスへの慚愧の念に耐えがたく、憑かれたように酷寒の街をさまよい、深夜、疲れはてて自宅にたどりつく。豊太郎はそのまま発病し、人事不省におちいる。昏睡は数週間つづき、その間に相沢謙吉が病床をおとずれ、豊太郎が帰国を承諾した事実をエリスに告げる。彼女は憤激して発狂し、やがて昏睡から醒めた豊太郎の腕には、〈エリスが生ける屍〉だけが残される。どういうメロドラマにもまして、深刻なすれちがいである。

このすれちがいには、作者のはっきりした作意があった。のちに石橋忍月が功名に賭けた豊太郎を批判したとき、鷗外はただちに忍月を反駁し、豊太郎がエリスを捨てるべくして捨てたのではないゆえんを強調し、これらは全部運命という見えない意図によってたぐり寄せられた人生の結末であるといっている。(注9)。

しかし、太田豊太郎がエリスを捨てざるをえなかった事態は、エリスへの愛が、すくなくとも自我発見の感動の回帰であったかぎり、彼にとって決定的な挫折と見なければならぬ。しかし、それは理性をもっては制御しがたい唐突な衝動、〈弱くふびんな〉〈特操なき心〉の瞬間の選択であり、さらには、その性格的な弱さが引き起こした運命のはからいだったのである。作為、もしくは作為のなかにある計算への批判は自由だが、それにしても、鷗外の意図した太田豊太郎像は変わらない。

こうして、きわめて図式的な言い方をすれば、「浮雲」は知識人の挫折の劇を、挫折を強いる現実のひずみとともに描こうとし、「舞姫」はおなじ劇を、挫折する自我の内部のひずみとともに描いたのである。

この二つの作品は、日本の近代化の早い時期に、当時の知識人が遭遇した本質的な矛盾を、外と内との両様から明らかにした作品と見ることができる。

もう一つ、「舞姫」と「浮雲」との共通点は、両者のテーマがいずれも立身とか出世とかの問題をめぐってあらわれているところにも示される。文三にしても豊太郎にしても、か

れらの自我の挫折は、はじめ立身出世の夢の挫折という形をとる。ここにも時代の明瞭な反映がある。

立身出世主義が手垢にまみれ、一種の倫理的批判の対象になるのはずっと後年の話である。維新による新時代の到来を信じ、新政府が理念として掲げた封建的身分制度の撤廃、職業選択の自由などを信じた時代の児にとって、立身出世主義はもっとも自然な、解放された情熱の対象だったのである。その野心的な情熱に性格をあたえ、成功を善とする価値観を決定したのは、人間の平等を説き、学問による立身の可能を示唆した福沢諭吉の「学問のすゝめ」であり、貧困や怠惰を露骨に侮蔑し、禁欲的な刻苦勤勉の思想を鼓舞した中村正直訳の「西国立志編」であった。

例えば、当時の有力な投書雑誌だった「穎才新誌」の明治十二年七月五日号に、常陸国下妻学校の学生軽部某のつぎのような投書が掲載されている（注10）。

嗚呼人誰カ 富貴ヲ 好マザランヤ 誰カ 貧賤ヲ 惡マザランヤ 而シテ世人往々貧賤ル者アリ 或ヒ ハ富貴ヲ 致ス者アリ 其故何ゾヤ 他ナシ 幼ヨリ 学ブト 学バザルト ニ由ル天ノ斯ノ 民ヲ 生ズル 豈富貴貧賤ノ 別アラランヤ 学ベバ 則チ 賢人ト 為ル 又之ニ 反シテ 学バザレバ 愚人ト 為ル 愚人ト 為レバ 即チ 貧賤ト 為ル（中略）抑モ 彼ノ 太政大臣参議ノ 賢聖ハ 何者ゾヤ 鬼カ 神カ 否人ナリ 又 田野ニ 成長スル 我レハ 何者ゾヤ 禽カ 獸カ 否 同ジク 人ナリ 而シテ 斯ク 雲泥 差違アル 所以ノ 者ハ 何ゾヤ 唯 学ブト 学バザルト ニ由ルノミ 故ニ 人タル者 学バズン バアルベカラズ 螢雪ノ 勞ヲ 為シ 刺針ノ 苦ヲ 忍ンデ 孜々 勉勵セバ 大人君子ト ナルモ 亦 易カラザルナリ。

ここにある明快な論理が、〈天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず〉という有名な一句をはじめ、「学問のすゝめ」の巧妙な敷き写しであるのは明白である（前田愛「明治立身出世主義の系譜」）。指摘するまでもないが、〈大人君子〉と〈太政大臣参議ノ賢聖〉が微妙にかさなっている事実も象徴的である。

内海文三も太田豊太郎も、これらの青年たちと同じ一時期を、その青春に確実にもっていた。文三も豊太郎も、作者がそうであったように、没落士族の子弟である。没落士族こそ立身出世主義の温床であった。封建的な階級制度における特権的身分から転落し、明治社会の支配的地位からも見放されたこれらの階層にとって、幕藩体制への郷愁が所詮かなわぬ夢であった以上、窮迫と無力からのもっとも手早い脱出が、現実社会での立身出世、

とくに官吏として自己を上昇させる〈出世〉にあったのはむしろ当然であった。「浮雲」の本田昇、二葉亭のいわゆる〈現時の日本に立つて成功もし、勢もある昇一流の人物〉たちが歩こうとした道である。「学問のすゝめ」が没落士族たちにとくに愛読されたのは偶然ではない。没落し、無力な親は子どもにその夢を托した。鷗外は森家を再興すべき大事なお兄い様として育てられ、内海文三の父親は〈腰弁当の境界〉にあくせくしながら、多くも無い資本を吝まらずして一子文三に学問を仕込む。文三はその期待にこたえて、朝夕勉強三昧に専心した。

鷗外の実妹喜美子（小金井）の回想「二人の兄」によると（注11）、彼女は鷗外を「お兄い様」と呼び、次兄の三木竹二（篤次郎）を「お兄いさん」と呼んで、おなじ文章ではっきり使いわけている。ここに家督を相続すべき鷗外を見る森家の人々の目、〈家〉のモラルがはっきり示された例である。

従って、彼らの立身出世の夢は個人の野心であると同時に、〈家〉の要請でもあった。家と、家につながる肉親の重さを負うことで、いっそう強制的であった。文三ですらも、故郷で立身を夢みる老母の存在を強く意識する。文三を責めるお政の口実に母親がいつも持ち出され、母のために〈石に噛付ても出世をしる〉という論法が展開される。太田豊太郎も洋行の官命を受けたとき〈我名を成さむも、我家を興さむも、今ぞとおもふ心の勇み立つ〉のを感じている。

明治の立身出世主義に差した最初の暗い影は、それが個人の純粋な情熱から、ただちに〈家〉のモラルとの結合を強いられた点にあった。しかし、「浮雲」も「舞姫」もその点には深く立ちいらない。豊太郎の免官と前後して母が死ぬという設定をあえてした鷗外は、その問題を意識して回避したとも思える。

しかし、この二つの作品は結果としては、明治の青年をとらえた最初の情熱が、それを貫くためにいかなる代償を払わねばならぬかを描いたものであった。ただ「学問のすゝめ」や「西国立志編」が投射した立身出世の人間像を、文学作品として最初に具体化したのは菊亭香水の「世路日記」（明治十七年）であり、坪内逍遙の「当世書生気質」（明治十八年）がそれに続く（注12）。しかし、この二作には、「浮雲」や「舞姫」のような悲劇性はまったくない。ここに登場する人物たちは立身の野望に燃え、刻苦して勉学にいそしみ、自分の未来をいささかも疑わぬ楽天的表情を身につけている。

こう見てくると、きわめて近接した時期に書かれた四つの作品群には、立身出世主義的人間像の観点からしても明らかな断層がある。詳しい論証ぬきに性急にいうと、文学的啓

蒙期の終りが、その断層の時期と重なるのである。「世路日記」や「書生気質」は文学的啓蒙期を担当した思想家にその精神の系譜をつなぎ、「浮雲」と「舞姫」はそれに背をむけることで、文学の近代化の端緒となる。

「世路日記」や「書生気質」は、戯作を継いだ方法上の問題はともかく、少なくとも時代のある動きを造型しえた点では、戯作からの確実な展開があったと見ることもできよう。しかし、いまはただ一つの現象として、日本の近代文学はそこからは出発しなかった。それというのも、それには「浮雲」や「舞姫」における悲劇的人間像が必要だったのである。日本の近代化の動いてゆく方向と、そこに組み込まれた自己の位置との一体感、立身出世主義の楽天性も実はそれであつたわけだが、そうした蜜月の崩壊が、近代文学の真の端緒だったのである。近代文学の生れ育つべき母胎＝近代化されてゆく社会構造への反逆は、日本の近代文学がその成立期において負わねばならなかった十字架であつた。その反逆なり違和なりは、「浮雲」にすでにその片鱗が示されていたように、本質として、日本の近代化の動いてゆく方向そのものへの否定に転回する質のものであつた。明治四十年代に、それを明確な個性の劇として演じたのが夏目漱石だったのである。

しかし、鴎外が「舞姫」を書いたとき、〈足を縛して放たれし鳥〉の悲劇を描きながら、鴎外はなお日本の近代の方向自体をまだ疑っていない。西洋と日本の距離を空間の差として捉える視点はまだ成立していないのである。〈自由と美との認識〉を本質とする西欧は、いわば理想的近代の未来像として彼の前にあつた。だから、彼は積極的に状況の変革へむかつて動いてゆく。帰朝後の鴎外には、医学と文学の二つの分野で、彼の眼に映じる後進性に徹底的な批判を加えつづけた一時期がある。むろん、その所在を明確に見抜いていた鴎外には、文学的啓蒙期におけるような楽天性、現実の動向との蜜月感はもはやない。彼の啓蒙は開明的啓蒙学者の仕事とは明確に一線を画している。

そして、明治四十三年に「普請中」を書いたとき、鴎外はすでに変っていた。この小説を「舞姫」の後身とする理解も一部にあるが、主人公の渡辺は、たしかに太田豊太郎の二十年後の姿と見れなくもない。

渡辺は某省の参事官である。ある夜、日本を訪れた外国の女性歌手と一夜の晩餐をともにする。彼女は二十年前、渡辺がドイツに留学していたときの恋人である。女はさまざまな手管を用いて、恋の記憶を再現しようと試みるけれども、渡辺は冷たく彼女を拒否する。かつてのライバルで、現に女と同行している男のためにさえ、平然と乾杯の盃をあげるのである。彼はもはや過去の亡霊の出現に動かされない。女は失望して夜の街を淋しく去つ

ていった。強いて要約すれば、ただこれだけの短い短編である。

女を拒否した心情の底にひそむのは、〈ここは日本だ〉、という醒めた認識である。鴎外のいわゆる（諦念）である。渡辺のこの認識は、一方では〈日本はまだ普請中である〉、つまり、西洋を模倣した普請中であるとの判断をとまなうことで、日本と西洋の差を時間の距離とする認識でもある。同時に、このときの鴎外はすでに自由と美についての認識を、〈是はみんな遠い、遠い西洋の事〉（「夜なかにおこった事」）とする諦念の人でもあった。この〈遠い〉という判断には、日本と西洋の差を空間の距離として捉える認識がある。渡辺参事官にとって、日本は西洋での恋の記憶が生きうる場所ではなかったのである。太田豊太郎の帰東の感慨と、この渡辺の醒めた認識までの距離はある意味でははるかに遠く、ある意味ではほんの一つの〈錆び〉だったともいえる。そして夏目漱石が「現代日本の開化」を講演するのは、「普請中」の書かれた翌年である。

注；

- 1、三好行雄 「日本文学の近代と反近代」 東京大学出版会 1972年
136頁
- 2、色川大吉『新編明治精神史』 中央公論社 昭和48年 26頁
- 3、島崎藤村「文学界の生まれた頃」（『早稲田文学』23号）
1925年 54頁
- 4、同上書 59頁
- 5、臼井吉見 『近代文学論争』 筑摩書房 昭和44年 328頁
- 6、和田繁二郎 『日本文学史』（近代） 法律文化社 昭和47年 〕88頁
- 7、関 良一 「『浮雲』の発想」『日本文学』 立教大学 昭和36年 27頁
- 8、小堀桂一郎 『若き日の森鴎外』 東京大学出版社 昭和44年 25頁
- 9、小田切秀雄 『文学史』 東洋経済新聞社 昭和36年 281頁
- 10、『新編明治精神史』 87頁
- 11、山室静 『評伝森鴎外』 実業之日本社 昭和35年 5頁
- 12、佐藤信夫 『日本近代文学概論——「挫折と反骨」の文学』 桜風社
昭和44年 93頁

参考文献

関 良一 「『浮雲』の発想」『日本文学』 立教大学 昭和36年

中村光夫 「日本近代小説」 岩波書店 1954年

中村光夫 『二葉亭四迷伝』 講談社 昭和33年

中村光夫 「近代文学と文学者」上 朝日新聞社 1980年「『浮雲』について」〔『文学』 昭和34年）

現代文学大系 『坪内逍遙・二葉亭四迷・北村透谷集』 筑摩書房 昭和42年

現代日本文学全集 『坪内逍遙・二葉亭四迷』 昭和31年

柄谷行人 『日本文学の起源』 講談社 1988年

佐藤信夫 『日本近代文学概論―「挫折と反骨」の文学』 桜風社 昭和44年

広津和郎 「二葉亭のリアリズム」(『作者の感想』 聚英閣 大正9年)

岩城準太郎 『自然主義以前の作家(上)』 岩波講座日本文学 昭和7年

榊原美文 『逍遙・二葉亭』 岩波講座日本文学史11 昭和33年

安住誠悦 『浪漫主義文学』 『現代文学史』 北書房 昭和44年

小田切秀雄 『現代文学史』 上巻 集英社 1975年

小田切秀雄 『文学史』 東洋経済新聞社 昭和36年

稲垣純正 「文学革命期と二葉亭四迷」(『岩波講座 文学』第四巻 岩波書店 昭和29年

林原純生 「二葉亭四迷の『浮雲』の同時代性」 『国文学 解釈と鑑賞』 至文堂
平成6年4月号

紅野敏郎・佐藤 勝・平岡敏夫編著 『近代小説研究 作品 資料』 秀英社 昭和44年

島村藤村 「文学界の生まれた頃」(『早稲田文学』231号) 1925年

久松潜一 『日本文学評論 近世・近代篇』 至文堂 昭和43年

石川 淳 『森鷗外』(現代選書17) 三笠書房 昭和16年

臼井吉見 『近代文学論争』 , 筑摩書房 昭和44年

河村敏吉 『若き鷗外の悩み』 現代社 昭和32年

木下杢太郎 「森鷗外」(岩波講座『日本文学』) 岩波書店 昭和7年

小金井喜美子 「森鷗外の系族」 大岡山書店 昭和18年

小林勇 『人はさびしき』 文芸春秋 昭和48年

小堀杏奴 『晩年の父』 岩波書店 昭和11年

小堀桂一郎 『若き日の森鷗外』 東京大学出版社 昭和44年

篠田一士 『続日本の近代小説』 集英社 昭和50年

森潤三郎 『鷗外森林太郎』 昭和書房 昭和9年
吉野俊彦 『森鷗外私論』 毎日新聞社 昭和47年